

現代教師像の研究 (一)

荒井貞雄

緒言

- 1 教師像の概念
 - 2 教師像研究の重要性
 - 3 教師像研究の史的概観
- 一、攻究問題
- 1 教師像構成要素の序列
 - 2 性、年令要素
 - 3 各要素の内容
 - 4 現職教師の観た教師像構成要素
 - 5 その要素の内容

二、研究方法

- 1 時期
 - 2 方法
 - 3 被験者
 - 4 予備調査
- 三、整理方法
- 四、結果の概要と比較
- 五、考察
- 六、要約
- 参考文献

緒言

1、教師像の概念

われわれが、「教師」と呼ぶ場合、それは学童に対する呼称である。同様に、教育者と呼ぶ場合も、被教育者

又は学習者に対してのみ意味をもつのである。シュナイダー (F. Schneider) は Lehrer-Schüler; Erzieher-Erziehende の対立語であつて、相互に関係する存在だと云つて居る。^(註1)この対立と云うことは、とりもなおさず、学童に対し教授活動、教導活動、援助活動を主として行うものを教師と呼ぶと解して差し支えない。

この対立、否、相互関係を、今日の学校と云う教育場について、少しく吟味して見よう。

学校と云う社会は他律的に形成される一種の集団である。即ち、入学当初、そこでは、学級は未知の個々の児童の単なる集合体にすぎない。彼等の間には何等の相互関係はない。それが、「教師の指導」と云う条件のもとに、相互に交渉し合い、組織化され、統一化されて、はじめて学級が形成される。かゝる組織化された社会に於て学習活動が行われるのである。この活動に常に最も深く、且つ、大きな影響を与える存在は教師である。第一に、教師は学習活動の方向、範囲等を決定する中心的存在である。第二に、教師はその学級社会の雰囲気を作成し、維持し、改良して行く責任をもつ存在である。この雰囲気のうちには於て、児童生徒は、その人格が形成されて行くのである。われわれが、教師と呼ぶ場合、それは学級の教師のことである。故に、教師の人格、その教養と態度、その能力と指導技術等は、直接間接に、児童の知的情緒の発達を規定して居ることが容易に想像出来るであらう。

次に、われわれが、教育者と呼ぶ概念は、児童即ち未成熟者のうちに奥深く潜在して居る価値的個性、天性又は可能性を、その児童の発達段階に應じて、実現させるべく、効果的な影響を与える存在即ち人物、人格構成による現実形成者を意味して居る。これに比し、教師はもつぱら、教材中心の活動者即ち技術者を意味する傾向が

ある。然し乍ら、前述の学級の中での教師の占むる位置、役割を洞察するならば、教師の本質的なものの中には、教育者の意味するものが漲つて居る。否、漲つていなければ、その存在の意味はない。故に、ケルシェンシュタイナー (G. Kerschensteiner, 1845-1932) が、教師を学校教育活動に於ける教育者だと強く主張して居るのは当然な事と云わねばならぬ。^(註²) 又、宗像氏が、教師と教育者は同一の概念ではないが、両者は實際上同一人格の両面である。従つて、教育者でない学校教師は良い教師とは云えないと論じて居るのも、うなづける事である。^(註³)

以上の考察により、教師の概念、機能について明らかになつたとすれば、次は、「教師像」の意味するものを明確にしなければならない。教師像の研究と云つた場合、理想的な教師の資質、精神構造、生活態度、活動のあり方の分析的綜合の究明を意味するものである。

演繹的方法による教師像研究の代表的なものの中に、ケルシェンシュタイナーのものがある。彼は、教師像をシュプランガー (E. Spranger, 1902-)^(註⁴) の生活類型にしたがつて、「社会的人間」に属する人格形態であると考へ、次のような説明をして居る。

教育者は、社会の精神的奉仕に献身するところの、社会的基本的タイプの生活型であつて、この生活型は、無限の価値の將來に於ける独自の担い手としての、成長しつゝある未成熟者への純粋な愛情から、その無限の価値独特の陶冶性の割合に応じて、常に確実に、この価値に感化影響を及ぼすことが可能であるし、また、この生活型は、上述の愛情を行為に表わすことをもつて、その最高の満足をみいだすものである。^(註⁵)

彼はこれに敷衍して、教育者の本質的構造として次の四つの因子を挙げて居る。即ち

- (一) 児童生徒の個性的發展を図ることに純粹の満足を感じる事。
 - (二) 生徒のもつ陶冶性に応じて、その個有の精神の傾向を効果的に実現する能力をもつこと。
 - (三) 發達しつつある人格、即ち価値の担い手としての未成熟な魂に真劍にとり組む熱情の所有者たること。
 - (四) 生徒の發達に持続的に影響を与えんとする強い意志と創造的知性をもつこと。
- 又、わが国に於ても、最近正木氏は、^(註6)同じ研究方法によつて、教師の本質的なものとして、(一)自己の設定する教育目標に向つて、全く自由意志をもつて努力して行く主体性、(二)その基本的態度、性格の根底には情熱と教育愛、(三)教育技術、(四)創造的叡知等に分析して居る。

以上、二つの演繹的教師像で明らかな如く、本質的な要素として、一面には特性即ち先天的素質とその發達、他の面には生活類型即取得的要素とその發達の二面の観点に立つて見ることが肝要である。

2. 教師像研究の重要性

現実の教師は、勿論理想像からは著しい距離にある。然し現実の教師の普遍的特徴を現実に把握することが出来るとするならば、そこに現実像と理想像との密接な關係が生来するのである。この意味からすれば、現実の教師の研究は、理想像設定と相俟つて教育活動の實際問題として極めて重要なものである。

即ち教師像研究の志向するところは、教育学研究の他の多くの領域と同じように教育の根底をなすものである。

良い教師、好ましくからぬ教師とはどんな内容を持つものであるか、又、どうすれば良い教師は養成出来るか、又は、教師の選択、現職者の修養、教師活動の規準、勤務の評価等に資せんとするのが、この研究領域の目的である。

特に、敗戦を経験した日本教育界に於ける現代の教師の姿を見ると、そこには極端なる類型が見られる。即ち、聖職型、或いは労働者型、或いは無律型と云うが如きである。将来、これが如何に解決されるかと云うことを考えると理想像を再び描く必要がある。われわれは、過去八年間に一二二八名の男女教育実習生を二十二の実習協力校に送った。二週間の集中教生々活終了直後の調査に依れば、理想がないと云う現実を味つて教職に就くことを願意するものが、実にその一七%一八〇名に達して居る。この点につき、唐沢氏は近著「教師の歴史」の中で示唆に富んだ次のようなことを述べて居る。即ち『最近あつたある教師が、「過去には教師像があつたけれども、現代では教師像なんでものではない。自分には教師像がつかめない」と告白して居る。案外このような教師の告白―教師像の喪失―こそ現代の教師の実態を把握しているのではなからうか』^(註7)

3、教師像研究の史的概観

過去に於て行われた教師像の諸研究は、その殆んどが常に児童・生徒・学習者との関連、又は生徒の人格形成に及ぼすその影響力と云う点についてであつた。方法的に、その多くの研究をまとめると次の如くである。

(一) 演繹的方法に依るもの

主としてドイツ教育界に於て久しい間行われて来たものである。最近では、さきに述べたスプランガー、ケルシエンシュタイナー等の教育学者は教師論の代表的なものである。我が国に於ては沢柳政太郎(1865-1927)は、教師の人間性を力説し、最近では前述の正木氏をもつて代表的なものと見られる。

(二) 帰納的方法に依るもの

この方法は教育学上の基礎概念からではなく、もつぱら、教育的事実、学習指導の実際から出発したものである。研究対象に依つて次の如く大別することが出来る。

- a、教師自身の経験及び自己評価。
- b、児童生徒に対して質問紙法及び品等尺度法を用いてなされる好き嫌いの教師像、良い悪いの教師評価。
- c、教師、校長及び教育行政官に対しての質問紙法及び品等法を用いての教師像。
- d、客観的資料、即ち生徒の成業率による測定法及び予診的性質をもつた教師のための専門的適性テスト。
- e、生徒の理想の教師を描いた綴方、又は恩師の人格、教育活動についての追想。
- f、現職教師の実践記録。

かくの如く広範囲にわたつて居るので、われわれの研究に関係のある教師及び児童生徒を対象としたものについては項を改めて吟味する。

(三) 歴史的方法に依るもの

教育史上、著名なる教育学者及び実践家について、その思想、人物、心理的精神的特性等を伝記、自叙伝等を

分析し総合的に集録して教師像を描出する方法である。

この種の研究に属するものには、前述のシュナイダーが、過去の教育学者があげた教師の資質をまとめた心誌の図式はよく知られて居る。^(註9) 我が国に於ては比較的多く宗像氏^(註10)、石谷氏^(註11)、正木氏^(註12)、林・勝田両氏^(註13)、唐沢氏^(註14)、其の他にも良き研究がある。

われわれは児童生徒による教師評価の研究を吟味するときが来た。この種の研究は早くから行われて居り、その信頼値は比較的高く、^(註15) 且つ重要視されて来た。

(1) 先ず、ベル(Bell, S.) のものをあげねばならぬ。^(註16) 彼は生徒がよい感化を受けたと思う教師と、悪い感化を受けたと思う教師についての調査をした。その結果を見ると(良い感化)

その時期

指導を受けたその期間

女子	一一一七才	頂点は一四才	一年間が大部分
男子	一一一一九才	〃	一六才 女子に同じ

(これに比し悪い感化を受けた期間は一年位早く、指導期間は殆ど差はない。)

(2) マクドナルドは、^(註17) 教師養成大学の学生のあげる良い教師の資質をまとめて居る。即ち

良い性質の順位

ユーモア、公平、熟慮、親しみ、清潔な外貌、服装、快い声、惹きつける力、生徒一人一人への興味と理解、誠実等。

悪い性質の順位

不公平、無思慮、いやな声と服装、皮肉、狡猾、下等な言葉、お天気や、杓子定規、無感情等。

良い指導方法

宿題が明瞭、指導案が組織統一化されて居る、単元終了毎にテストのあること、板書使用、体験に基いた説明、前時の復習、クラスに於ける討議が旺盛等。

好ましくない指導方法

不合理な宿題、教授内容の貧困、生徒を子供扱いする、不合理なテスト、まとまりがない等。

(3) フレイザー及びアアメントウトは小・中学生一九〇〇〇人に対し「生徒を一番よく助けて呉れる先生とはどんな先生か？」との質問に対し、手紙で答えさせると云う大規模な調査をこころみた。^(註18) その結果を指摘数の最も多いものの順に拾つて見ると

A、教育能力

a 勉強を助けてくれる。

b 厳格である。

c 教え方に表れる性格は、一克己、正直、親切、自信、従順、公正。

d 明確な宿題、生徒を専念させる。

e 厳、緩、宜しきを得て居る。

f その他、勉強を愉快にさせる、本ばかりでない、評価が正直で公平、生徒の相手になる等。

B、人がら

a 忍耐強い。

b 親切。

c 愉快、元氣、おもしろい、よい冗談。

d ユーモア。

e 服装や室内が清楚。

f その他、物慣れて居る、規則的、健康体、聰明等。

C、生徒との関係

a よい市民となるように生徒を鼓舞してくれる。

b 公平

c 挫折しないようにはげまして呉れる。

d 生徒の活動に興味をもつ。

e 友誼的である。

f その他、生徒を信ずる、クラス外の事についても生徒を知っている、協力的、生徒間の指導力をみとめる等。

わが国に於けるこの種の研究は佐藤氏の報告を除くと、その殆んどが最近十年以降のもので、未だに研究途上にあると云えよう。これ等の研究は、沢田氏が^(註19)指摘して居るように教師と生徒との相互作用、即ち両者間にか

もし出される力動的関係の素材に対する因子的分析、整理等には余り留意されて居ない。むしろ、それは今後の課題である。特に、その資料を得る方法並びに整理方法が未分化であり、区々である為め、例えその結果の信頼値は高いとしても、比較研究の不便及び標準化又は普遍性をつかみ得ないと云う事實は、依然予診の域を出ないと思う。

その多くの研究中、上武氏が大中市及び田舎に於ける小学校一年生から高校三年生迄の男女四五三八名に対し、「あなたはどんな先生が一番好きですか」の質問を出し、自由列挙法に依つて書かせた研究は注目に値するものである。集つた資料は八項目に分類し、整理された。^(註22)報告された第2、3、4、6、7、9の各表から、われわれが拾つた反応度は次の如くである。

反 応 度		No.			
4	3	2	1	分	類
趣味に関するもの	指導に関するもの	人格・性格に関するもの	能力・学識に関するもの	全生徒の反応%	
〇・八二	四一・三〇	五六・九〇	九・三〇		
—	—	—	—	1	前 学 年 に 対 す る 反 応 の 増 減 %
	14.88	6.18	2.33	2	
	-16.20	4.20	-9.40	3	
	2.91	5.03	3.11	4	
	16.65	-6.65	-1.80	5	
	2.48	2.02	-1.59	6	
	3.40	-0.70	1.12	1	中 学 校
	3.19	14.03	2.09	2	
	0.83	15.58	0.85	3	
	1.78	3.54	7.62	1	高 校
	0.66	14.32	0.68	2	
	-1.56	-23.24	8.10	3	

第 1 表

8	7	6	5
その他	言語に関するもの	性・年令に関するもの	外貌に関するもの
〇・八二	一・五二	一・九四	〇・六八
—	—	—	—
	-0.40		
	-0.02		0.61
	5.99		1.46
	-4.22		-1.54
	7.38		2.48

(註、全生徒の反応の%は原報告表のものであるが、統計に不明な点があると思う。)

第一表で自明の如く、反応の五七%は人格、性格に関するもので、次に指導に関するものが四一%、第三番が能力・学識に関するもので九%である。前学年に対する反応の増減では、全般的に見て、高学年は増大して居ると云う以外には余り意味がない。

次に分類別とその内容について小学六年生、中学二年生、高校二年生の立場から分析して見ると、第二表の如き結果を示す。即ち

学年間に於けるはつきりした傾向は、学問、運動、芸能、やさしい、明朗、おこらない、ユーモア、よく教える、理解のある等の反応度にあられて居る。

第 2 表 条件 (因子) 分析

分類	学年 条件 回答数	小六	中二	高二	分類	学年 条件 回答数	小六	中二	高二
		%	%	%			%	%	%
能力・学問	頭脳、実力	0.70		0.26	外觀	容貌端麗		0.23	
	教養、常識	0.84	1.20	3.29		美しい、きれい	0.28		0.65
	学問			6.38		清潔な	0.84	0.23	0.44
	教科	1.12			指導に関するもの	よく親切に熱心に教える	24.64	17.94	10.12
	運動、芸能	0.28	2.76	3.30		公平、ひいきしない	10.64	10.12	10.12
				理解のある		0.56	5.98	22.22	
				生徒と同じに行動し、同じになる			2.76	5.94	
				本を読んでもくれる話をしてくれる		2.52	1.15	1.76	
人格・性格に関するもの	やさしい	12.86	5.29	0.88	試験の点が甘い		1.84	2.64	
	ほがらか、明朗	3.08	7.13	13.42	外に33件				
	親切	9.24	7.36	8.58	性・年令	男教師		0.23	
	親しみやすい		5.75	8.14		女教師		0.23	0.44
	面白い、愉快	4.76	4.14	3.30		若い先生		0.46	2.20
	おこらない、叱らない	2.80	3.22	0.88	其他	5条件	0.84	0.23	0.44
	ユーモアに富む		0.92	11.88					
	気持ちよい、さつぱり	0.28	1.84	3.52					
	はきはきした		7.82	2.64					
	可愛がる、面倒みる	2.80	1.38	1.32					
	熱心な	2.24	.69	1.54					
	少しおこる	1.40	1.15	.66					
	真面目	2.24	2.53	1.98					
おとなしい		2.09	2.42						
外49条件									
趣味	趣味が広い			2.86					
	同じ趣味								

現在教師像の研究

一、本研究の問題

緒言に於て明らかにした如く、われわれは児童生徒の評価する良い教師、悪い教師の内容は、教育学研究上極めて重要な資料だと考えて居る。又同時に、教師を評価したその児童生徒の指導に當つて居る教師が描く教師像とはどんなものであろうか？ 児童のそれとの間に如何なる相関があらわれるであらうか？ と言うことも同じような比重をもつと考ふる。

われわれは、既に、わが国内外の数個の尊い研究を概観した。そのうち、サンホード・ベルのみが、学生に対し「君がよい感化を受けたと思う教師について次の各項に答えなさい」と、濃薄の程度はあつても、過去に於て、学生が体験した具体的な現実に基づいての資料である。石氏や上武氏は生徒の好き、嫌いの観点に立つての研究で、なかば具体性はあるが、この場合、その生徒の知覚、情緒及び欲求等に依つて、可なりの条件付けはまぬがれないと言わねばならぬ。その他の研究の多くは、児童生徒の過去の体験に基く抽象的な判断、評価に資料の根拠をおいて居るのである。

そこで、われわれはベルの方法に基いて、生徒が過去に於いて経験した多くの中から、「この先生が一番良い先生であつた」と云う一人の先生を選出して、その先生について書かせることにした。従つて、良い先生などに今迄出会わなかつたと云う児童生徒も当然居る可能性はある。その結果の或る部分は、ベル及び上武氏の結果と対比し、又現職教師の結果と比較研究することにした。即ち、われわれの研究の問題は次の各項を究明せんとす

るにある。

- 1、生徒学生が体験した教師像の構成要素の序列。
- 2、教師像の性及び年令別の内容。
- 3、その要素の内容。
- 4、現職教師の指摘する教師像の構成要素の序列。
- 5、その要素の内容。

以上の結果と既往研究の結果との対照

ここに報告しようとするものは1、2及び3に関するもののみについてである。問題4及び5については他の稿にゆずる。

二、研究 方法

1、時 期

調査は昭和三十二年九月より十月に亘つて、当時の相愛女子短大第二学年の教育実習生諸君が、筆者の計画によつて、実習協力校の教生指導教官の協力のもとに、分担実施した。

2、方法は九項に答える質問法で、用いた用紙は26cm×38cmの形に次の如く印刷してある。

相愛教生資料

(調査者がはじめに終り迄朗読し、質問に答え、それから始める。30-40分を与える)

1. 学校名 2. 学年 3. 学級 4. 学生男女(どちらかを消す)
5. 記入年月日 6. なまえ(記入してもしなくともよい)

あなたにとって良い先生は誰でしたか
今迄のあなたの先生のうちで、よい先生だと思ふ先生を一人思い出して下さい。その先生の名前を書くものではありません。その先生について次のおのおのについて最も強く感じていることを一つだけ書き入れて下さい。(時間は充分ありますから、ゆつくりと、けれどももとなりの人と話し合つたり、見たり、見せたりすることはいけない。) よかつた先生がなければ書き入れなくともよい、けれどよく考えてごらん下さい。

1. その先生はどんな性格、性質であつたか。

答

2. その先生の趣味としてはどんなものがあつたか。

答

3. 女の先生か、男の先生か、又何才位であつたか。

女 _____ 才 (大体何才か)
男 _____ 才

4. 教える事がらはいつてもよく知つて居たか、それとも取り立ててそんなことは感じないか。

答

5. 教えること以外の教養、知識、経験の程度は。

答

6. 私との関係で、その先生について忘れられないことは一体何であつたか。

答

7. その先生の教え方は上中下のうちどれだろうか。

答

8. その先生はよく勉強、研究しただろうか。

答

9. 以上の1から8迄のうちでその先生について最も強く感じて居るものを○でかこみなさい。(下に番号がある)

1 2 3 4 5 6 7 8

3、被験者は、中学・高校及び大学二年生及び小学校六年生男女二三一六名にして、相愛学園の三校を除く九校は何れも大阪市内の公立学校である。その内訳は第三表に示す通りである。

第3表 被験者

学校・学年別	学校数	性別	被験者数	回答率(%)	記名率(%)
小六 年 校 生	3	男 女 計	83 78 161	75	89
中二 年 校 生	3	男 女 計	687 642 1329	81	67
高二 年 校 生	4	男 女 計	298 445 743	95	60
大二 年 学 生	2	男 女 計	25 58 83	100	20
計	12	男 女 計	1093 1223 2316	87.8	59.0

4、予備調査

昭和三十二年九月、S中学校一年生二組の四十八名の自然学級を対象に筆者自身の手により、謄写刷りを用いて集団と同じ学級の名列により奇数生徒二十四名の個別面接により調査を行った。その結果、調査質問に若干の修正を加えた。又集団と個別の結果について、次項に於いて述べる評価方法により得た数値に基いてその相関を算出してみると $r = 0.932$ となり、その信頼性の高いことを発見した。

三、整理方法

- 1、質問3と9を第一に統計した。こゝで不明瞭なものは除去した。
- 2、八要素別にその反応を各学校毎に集計した。
- 3、各要素領域に属しない反応は一応除去した。
- 4、各要素一反応に対しては3点の評価値を与えた。
- 5、各要素に二反応あつた場合は一反応に対し1.5点、三反応あつた場合は各1点の数値を与え、四反応以上あつた場合は主要反応を三種にまとめ、他は除却した。然し乍ら結果から見て、三種以上の反応は殆んど見られなかつた。従つて、こゝに報告する場合は反応即ち因子の数を基礎として整理した。然し、評価値は集団及び個人調査結果の相関係数算出にあつては極めて有効であつた。
- 6、教師の性及び年齢に関する要素は別に扱つた。
- 7、既往研究の対比研究は結果概要の各項で対比が妥当であつて、且つ可能なもののみについてすることにした。

四、結果の概要

- 1、最も強い印象をもつて居る教師像構成の要素の順位を第4表に依つてみると

第4表 最も強い印象をもつた要素順位

番号	構成要素	学生別											
		小学6年			中学2年			高校2年			大学2年		
		回答率(%)	因子種数	印象順位	回答率(%)	因子種数	印象順位	回答率(%)	因子種数	印象順位	回答率(%)	因子種数	印象順位
1	性格・人格	77	22	5	77	28	4	95	19	3	100	22	1
2	趣味	78	14	4	63	28	6	75	21	7	85	7	5
3	一般教養	60	3	7	53	21	7	77	15	6	82	15	7
4	理解・情熱	82	6	1	86	11	1	95	17	1	84	20	6
5	教材のマステリー	81	7	2	84	9	2	89	14	5	94	12	2
6	指導技術	80	5	3	82	8	3	94	5	4	88	4	4
7	研究態度	75	7	6	71	9	5	95	8	2	91	10	3

- a、大学生は一位が人格で百パーセントの回答、第二位が教材を充分消化して居ることが九四パーセントの回答、第三位が絶えざる研究態度、第四位が指導技術である。
- b、高校生の一位は教育愛・理解、二位が人格・性格、三位が真剣な研究態度、四位は大学生と同じく指導技術となつて居る。
- c、中学生の一位は理解して呉れる先生、愛情を示して呉れる先生で、二位が教材消化である。指導技術は第三位、人格・性格が四位となつて居る。
- d、小学生は中学生と同じく、自分を理解し愛してくれる先生が一位で、教える事についてよく知つて居ることが二位、三位は指導の上手な先生、四位は趣味であつて、人格、研究態度と云うような要素は余り問題にならない。
- e、以上によつて自明の如く、大学生には、人格、教材の消化、研究態度等に比重があるが、小中高校生には、自分を理解して呉れる、教育情熱旺盛なる先生は忘れられ

ない要素であるように見受けられる。然るに、大学生には教師の人格が最も重い要素である。

f、この印象要素を全被験者を通じて見ると

- | | | |
|-----|-----------|-------|
| (1) | 性格・人格 | 八七・五% |
| (2) | 教材のマステリー | 八七・〇% |
| (3) | 理解している、愛情 | 八七・〇% |
| (4) | 教え方上手 | 八六・〇% |
| (5) | 研究態度の真剣性 | 八三・〇% |
| (6) | 趣味の豊かな先生 | 七四・七% |
| (7) | 一般教養・知識 | 六八・〇% |

となる。

g、前項に示したものをみると各要素とも、印象強いものであることがうなづける。首位の人格・性格と尾位の一般教養・知識との差は一九・五%の差である。これを上武氏の結果（第一表参照）と比較すると、そこに、格段の差異がうかがわれる。即ち上武氏の結果は人格と指導に全反応の九八%が集中して居る。これは全くの自由作文と構成要素別自由反応との調査方法の差異からの結果にはかならぬ。この差異については今後更に研究の必要があると考えられる。

h、各要素に反応した因子の種類の数概して小学生は少く、高校、大学生は拡大されて居る。この点は、上

第5表の1 性に対する回答(%)

回答別	学校 数及び%		小学6年		中学2年		高校2年		大学2年		計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
無答	4	2.5	126	9.5	150	20.2	1	1.2	261	11.2		
男教師	104	64.6	897	67.5	414	55.9	42	50.6	1457	63.1		
女教師	53	32.9	306	23.0	179	24.1	40	48.2	578	25.7		
計	161	100.0	1329	100.0	743	100.0	83	83	2316	100.0		

現在教師像の研究

第5表の2 年齢に対する分析(%)

年齢区分	小学生		中学生		高校生		大学生		平均	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
20 ~ 30	29	39	48	65	40	61	21	25	32	45
31 ~ 40	57	48	34	26	37	26	38	38	42	36
41 ~ 50	13	7	16	8	15	7	41	27	22	12
51以上	1	1	2	1	5	6	10	10	5	5

武氏のものとはほぼ一致して居る。

2、教師像の性及び年齢別

男教師は小中高及び大学生を通じ女教師よりは圧倒的に好評を得て居る。第5表の1について見ると男教師六三・一%に対し女教師二五・七%を示して居る。最も著しいのは中学生であつて六七・五%に対し二三%、その反対に大学生は男教師五〇・六%に対し四八・二%と急速に緩和されて居る。年齢について、表5の2の分析表によると男教師は四二%は三〇才代、三二%が二〇才代、女教師は二〇才代が四八%、三〇才代が三六%
教師と接触が拡大されて居る大学生は、四〇才代、五〇才代と減少率が洵に緩和されて居ることも見のがせない発見である。

第6表の1 性格構成内容

内容 番号 学生及び%	反 応 (因 子)												計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
小学 六年	温 しい、や さしい	明 朗	強 い	ユ ーモ ア	親 切	は きは きし てい る	き つち りす る	こ わい 感じ	何 でも でき る	用 心深 い	清 潔	そ の他 11	22
%	38.5	22.4	8.6	5.0	3.7	3.7	3.1	3.1	2.5	2.5	1.8	6.9	100.0
中学 二年	明 朗	や さしい、 温しい	情 熱、熱 心	儿 帳面	理 解力 ある	親 切	親 しみ 易い	潔 癖	ユ ーモ ア	公 平	真 面目	そ の他 17	28
%	27.5	13.3	8.2	6.7	6.1	5.6	5.4	4.7	4.3	3.2	2.4	14.2	100.0
高校 二年	明 朗	や さしい、 温しい	儿 帳面	情 熱、熱 心	誠 実	活 発	親 切	真 面目	潔 癖	意 志強 固	威 厳あ る	そ の他 8	19
%	30.0	23.6	10.6	5.6	3.4	2.7	2.8	2.2	2.1	1.5	1.4	4.1	100.0
大学 二年	明 朗	情 熱、熱 心	や さしい、 温しい	親 切	儿 帳面	誠 実	活 発、積 極性	あ りの まま	公 明正 大	よ くし やべ る	神 経質	そ の他 8	22
%	32.1	26.2	11.4	6.2	3.4	3.0	4.0	4.2	2.0	1.1	1.0	5.5	100.0

上武氏は性について中学生には何等の差異も示して居らない。然し年令については若い先生が望まれて居る。高校生は何等特徴を示して居ない。

3、要素の分析―教師像構成要素の因子

a、教師の人格・性格要素

第6表の1が示す如く、小学生の指摘する八〇%近くが、やさしい、明朗、強いと云う因子。中学生は明朗、やさしい、情熱・熱心、几帳面、理解力、高校生は中学生と同じ傾向を示して居るが、第一因子明朗、やさしいの因子が特に強い。この傾向は大学生に於ても殆んど變つて居ない。

われわれの発見では中学生以上は、明朗が第一因子でやさしい、温しいの因子は小学生が最も強い。

第2表に依つて明らかな如く、親切、親しみ易い因子は上武氏の結果とはその比重が異つて居る。然し、明朗、やさしいの因子については一致して居る。

既に自明の如く、小学生に於て「強い」、大学生に於て「神経質」「よくしやべる」の如き、余りかんばしくない因子も現われて来て居る。これは、「あの先生」と云う具体性に基いたものである事が判然として居る。

b、教材の消化

第6表の2に依つて概観すると、教材の熟知は圧倒的高率で、これは教師の生命であると痛感する。こゝでも見のがせない事は、「あまり知らなかつた」、「知らないで困つたこともあつた」又は「サボリ屋だつた」と云うが如き反応が、小中高大の各層の学習者によつて赤裸々に表示されて居る。

c、教育情熱・熱心

生徒学生にとり、「私を理解して下さいる先生」は、殆んど例外なく八〇%を上まわつて居ることは、教育活動

第6表の2 教材のマステリー

内容 番号 学生及び%	因子					計
	1	2	3	4	5	
小学生	よく知っていた	まあ普通	関連した つていた ものも知	あまり 知らなかつ	その他3	7
%	83.0	6.2	3.5	3.5	4.0	100.0
中学生	よく知っていた	普通であつた	知らない とすぐ研 べる	ともあつた 知らないで 固るこ	その他5	9
%	82.4	8.1	2.5	2.7	4.3	100.0
高校生	よく知っていた	普通であつた	関係科目 もよく知 つていた	あつた あまり知 つていな	10	14
%	84.6	5.5	2.4	2.4	5.1	100.0
大学生	熟知	専門外の こともよ く知つて いた	私共に 研究をよく すすめた	サボリ屋 どちらか と云えば	その他8	12
%	90.7	3.2	2.0	1.4	2.7	100.0

の本質的因子だけに、正確に表れて居る。「何となくひかれる」、「忘れられない先生」、「不親切が忘れられないがよい先生であつた」、「その時は嫌つたが、今になるとあの先生のおかげで私の今日はある」と云うような反応が、特に高校生、大学生に率は低いが数多くある。

上武氏の指導に関するものの項に、「よく教える、親切に教える、熱心に教える」又は「理解のある」として次の数値が表示されて居る。(表2を参照)

第6表の3 教育情熱、理解

内容 番号 学生及び%	因						子	
	1	2	3	4	5	6	7	計
小学 6年	私を一番よく理解 していた	何でも相談出来た	よく元気づけてく れた	何でも骨折つてく れた	私のこと全部は知 らない	熱情にひきつけら れた		6
%	83.0	6.1	4.2	4.1	2.2	0.4		100.0
中学 2年	私を一番よく理解 していた	私を知るため努力 した	私のことをよくや つてくれた	クラス全体を考え ていた	忘れられない先生	私を知らないこと もあつた	その他 6	12
%	81.1	8.0	4.1	2.1	2.0	1.2	1.5	100.0
高校 2年	私を一番よく理解 していた	どこ迄もやつてく れた	みんな好いていた	熱心に動かされた	忘れられない	何となく引かれた	その他 11	17
%	80.6	7.1	3.2	3.5	1.7	1.0	3.0	100.0
大学 2年	私を一番よく理解 していた	私を知る努力	クラス全体を知る 努力	私のために犠牲に なつた	希望を与えてくれ た	親切が忘れられな い	その他 14	20
%	80.1	5.2	3.1	2.3	5.2	1.1	3.00	100.0

現在教師像の研究

教えること
二四・六四%

理解のある
五・五六%

われわれの発見と右の数値を対照すると余りにも低い。

小六
中二
高二

一一・九七%
五・九八%
一一・二二%

第6表の5 研究態度

第6表の4 指導能力と技術

現在教師像の研究

内容 No. 学生及び%	因 子					
	1	2	3	4	5	計
小学 6年	よく勉強していた	何でも研べた	次の日には必ず調べ来た	余り勉強しない	その他 6	6
%	72.1	9.5	6.1	4.9	7.4	100.0
中学 2年	熱心だった	教材以外は余りしなかつた	よく小説は読んだ	余りしない	その他 5	9
%	81.2	6.6	6.5	2.0	3.7	100.0
高校 2年	非常に勉強した	新しい知識をよくとつた	次の日に研べてあつた	余りしない	その他 4	8
%	83.5	10.9	3.1	1.1	1.4	100.0
大学 2年	専門科目は完全	一般教養をつけていた	時間さえあれば読書した	経験を重じた	その他 6	10
%	88.8	2.0	2.1	2.1	1.9	100.0

内容 No. 学生及び%	因 子					
	1	2	3	4	5	計
小学 6年	上手だった	まあ普通	あまり上手でない			3
%	91.3	4.3	4.4			100.0
中学 2年	極めて上手	普通	熟方もつた教え	きびしい	その他 4	8
%	86.1	10.0	1.0	1.0	2.9	99.1
高校 2年	教えた あらゆる角度から	教材完全消化	協同研究の方法	楽しい学習	個人指導が上手	5
%	42.2	41.6	3.6	2.4	10.2	100.0
大学 2年	極めて上手	側人生活指導	普通	むしろ下手		4
%	89.2	5.0	4.5	3.1		100.0

第6表の6 趣 味

内容 No. 学生及び%	因 子								計
	1	2	3	4	5	6	7	8	
小学 6年	スポーツ	芸術的	文学的	工芸農芸	科学的	教育的	外国語	ない	14
%	26.1	25.3	20.4	10.1	4.2	3.3	3.2	7.4	100.0
中学 2年	スポーツ	芸術的	文学的	工芸農芸	多種	自然科学	道徳的	ない	63
%	29.4	20.3	17.4	14.8	4.6	4.1	4.0	5.5	100.0
高校 2年	スポーツ	工芸農芸	文学的	芸術的	科学的	飲食	哲学的	ない	75
%	28.1	17.3	17.1	16.0	11.1	2.4	2.0	6.0	100.0
大学 2年	スポーツ	工芸農芸	文学的	芸術的	科学的	語学	ない		85
%	22.9	22.5	22.4	18.0	7.2	7.1	8.0		100.0

現在教師像の研究

然し乍ら、上武氏は重視される条件の学年的変化として、^(註23) 中、高校生に及んで、「よく教える」「理解のある」、「よく相談にのる」が強く出されて居ることも見のがせない点である。

d、指導技術及び能力

第6表の4で明かな如く「上手な指導、教材の完全消化を目指しての指導」と教育活動の現実を支えるものだけに、良き教師はこの因子を消化することは第一の修養である。

第6表の7 一般教養

内容 No. 学生及び%	因子									計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
小学 6年	ゆたか	普通	低い	わからぬ						3
%	33.5	20.4	8.1	38.0						100.0
中学 2年	豊富	普通	経験ゆたか	広い知識	芸術的	文学的	多趣味	低い	わからぬ	21
%	38.1	12.6	12.5	10.1	10.0	8.7	2.5	4.0	2.0	100.0
高校 2年	豊富	経験充分	博学	宗教的	知的	普通人	低い	わからぬ		15
%	55.7	18.0	9.8	6.0	4.3	2.7	2.5	1.0		100.0
大学 2年	豊富	努力し身につけて	宗教的	文芸性	多趣味	創造性豊か	外国語	余りない		15
%	68.5	6.2	6.0	5.2	5.1	4.4	2.5	2.1		100.0

e、研究態度

第6表の5で自明の如く、「よく勉強していた」「専門科目は常に完璧であつた」の反応は圧倒的高率、特に大學生に及んでは殆ど九〇%を示して居る。研究するのは直ちに自己研修であり、良き教師に直通する道路でもある。

f、趣味

他の要素と異つて極めて広範囲に亘つて居る点が注目すべきである。教養がないとはつきり印象を表現して居る点も特徴と云わねばなるまい。

g、一般 教養

こゝで目立つことは小学生が「わからぬ」が、三三・五%の高率を示して居ることである。又、教養がない又は低いときつぱり表現して居ることである。又、高、大、大学生になると、努力して教養を身につけていた、宗教的、文藝的、創造性と云うが如き因子が二〇%にも及んで居る。この傾向は上武氏の場合とも一致して居る。

五、考 察

1、第3表に示した如く、回答しなかつた被験者が、小学児童は二五%、四〇名、中学生は一九%、二五三名、高校生は五%、三七名あつた。しかも、この四三〇名のうち高校生の一名を除いて全部が記名にして、その回答内容は抽象的なもので、その大部分は、質問3の項で「僕には良い先生はなかつた」、「女の先生は二〇才と四〇才で、男の先生は色々あつた」の如く表現して居る。又、質問9で「良い先生なんて僕はないんだからわからない」と書いてある。勿論、学校生活の期間と云うことは、こゝに於ては当然考慮せねばならぬが、高校生の五%が過去一一年間の学校生活に於て、自己を知つてくれて居る先生がない。又自分が心を開いて相談に行く先生を持たなかつたと云う、この事実は見のがすべく余りにゆゆしい教育問題である。恐らく、これ等教育不具児はケース研究を要する対象であり、担任教師の重荷となつて居る生徒であらうことは想像にかたくない。同時に、

学校教育者の連帯責任でもある。

2、われわれの研究では、はじめから教師像を八個の要素の観点から因子分析をした事は妥当であつた。比較研究を手ばなしするには、その根拠に無理はあるが上武氏の結果は、人格、指導及び能力、学識に集中していて、他の面は極めて稀薄である。特に一般教養、教材、教育精神に対する反応等は、本質的要素であるにかかわらず、比重から見ると軽いものである。われわれの結果を見ると、

- 1、性格・人格
- 2、教材のマステリー
- 3、教育精神
- 4、指導方法
- 5、自己研修の態度
- 6、趣味
- 7、一般教養・知識

の順を示し、特に大学生になると人格要素は絶対性を持ち、小・中・高校生には教育精神、即ち理解と愛情が第一要素として登場して居る。(第4表参照)

われわれは、既にケルシェンシュタイナーや正木氏の演繹的方法に依る像を吟味した。そこに描かれた理想像は、われわれが用いた帰納的方法に依つて得た像とを対比する時、そこに極めて妥当な相関関係のあることを発

見するのである。

3、学校教育に於いては、女教師より男教師の方が好評を得て居る。(第5表の1参照)就中、中学生時代はその男女を問わず、男教師について居る。それが大学生になると非常に緩和され殆んどその差は認められないと云う傾向を示して居る。その理由については、更に研究の必要があるが、因子分析に現われた処を見ると、中学生の場合には、「同じに行動する」、「一緒に勉強する」等に、又大学生になると「信頼出来る」、「尊敬する」、「二重人格でない」、「学問的充実」等に依つて居ることがうかがわれる。

4、教師の年令の要素は、二〇代三〇代の教師が圧倒的に各学年を通じ受けられて居る。性と同じように、年令についても、大学生になると急に四〇代、五〇代と変化の傾向をたどつて居る。年令に対する生徒学生の理由も性に対する場合とほぼ同じであると考えられる。

ベルの研究が示すように女子の一四才(中学二年)男子の一六才(高校一年)が学校教師から最も強い感化を受ける時期と云う事実には、教師の性及び年令は重要な要素である事を認識せざるを得ない。

5、われわれの研究は、各被験者の具体的対象についての資料であつた。従つて集つた資料も極めて自然のもので、必ずしも絵にかいたばた餅式の完全理想画ではなかつた。それは、像構成の八要素の各々の因子分析によくあらわれて居る。あの先生は、「よくしやべる」、「神経質」、六年生には、「あの先生は強い(腕力の意味)」と云うが如き因子である。即ち、教師像には、おおよそ不合理で且つ望ましくない因子も数多くあらわれて居る。

然しながら、全体的には、演繹的方法による教師像は極めて接近した像が描かれて居ることは、注目し得べ

き現象であり、唐沢氏の指摘した「現代には教師像はないようだ」とは反対のあらわれである。とは云うものの、児童生徒に与える教師像の持主は量的基礎に立つならば、唐沢氏の指摘現象は正確とも考え得られるかも知れない。これ等の問題は正に課題である。

六、要 約

われわれは、ここで、われわれの攻究問題に応えることにする

1、教師像構成要素の順位について

a、教師の人となりが第一要素であり、第二位は、教材消化と学習者を理解し愛する態度・情熱であり、第三位は教え方上手、第四位が教師の自己研修即ち研究態度の真剣性、第五位は趣味の豊かな先生、そして最後に博い教養と知識要素である。

b、学習者の心身発達の過程により、この順位に相当の開きがある。即ち小中高校生の一位は学習者を理解する教師、愛情に燃える先生。大学生には人格性格のすぐれた先生が圧倒的に強い。

c、上武氏の結果と比較する時、教師の人格、指導及び教材に就いては一致して居る。但し上武氏の結果は、人格及び指導の要素が圧倒的であるに比し、われわれの結果は全面的に比重がかゝり、首位と尾位の差が僅か二〇％に過ぎない。ここに研究方法の妥当性に関し更に検討を必要とするのである。

d、反応因子の種類の数是小学生から大学生に向つて拡大の傾向をたどっていることについては既往の研究と

ほぼ一致して居る。

2、性及び年令別について

a、被験者全員を通じ男子教師六三%に対し女子教師二六%。

b、大学生は性の区別は殆んど見られない。

c、年令については、四〇才迄、二〇才代では女教師が強く、三〇才代では男子教師が強く影響して居る。

d、こゝで注目すべきは大学生は教師の年令が進むにつれ、学生の方は小中学と異なり、その減少傾向が緩和されて居る。しかし、これは、人格を第一要素とする大学生には当然の帰結とも考えられる。

3、各要素の因子分析について

a、教師の性格

各学年を通じて

やさしい性格

明 朗

熱心・熱情

几 帳 面

親 切

親しみ易い

等の因子が最も強くあらわれて居る。

b、教材の消化

教える事柄をよく知つて居るのは全回答を通じて八五%、大学生は九〇・七%を示して居る。

c、教育情熱

こゝで最も顕著な現象は、「あの先生は私を一番よく理解して呉れて居た」の反応が、全体を通じて八〇%を上まわつて居ることであつた。「忘れられない」、「不親切がよかつた」、「あの時は嫌いだったが今になつて見ると矢張りあの先生が一番私のためになつた」又は、「私の今日あるのはあの先生のおかげだ」と云うが如き反応が多かつた。

d、指導が上手

これは、教材消化と平行されるべきもので、良き教師の第一件である。

e、教師の研究態度

教育活動の中心は教材と方法に託して勉強する。即ち価値的なものを味い、創り出す事に依つて、その性格、人格が形成される。この場合、その活動の中心的存在である教師の勉強態度が如何に学習者に影響を与えるかと云ふことは余りに自明の事実である。これが自己研修、即ちたゆまざる成長を意味する。特に大学生になると自己の専門科目に対する研究と云ふことは殆んど八八%を示して居る。

f、趣味の広範囲を指摘して居るが、これは人格の綜合性の原理からすると、一般教養にも通ずる事柄であり、極めて自然の姿である。

g、一般教養

この要素で目立つ因子は

「わからぬ」——特に小学生が三八%を示して居る。

「努力していた」大学生・六%。

「宗教的」高校、大学生が各・六%等。

である。

以上の結果を既往研究成果に対比して見るとき、差異を示して居るものは次に要約出来る。即ち

- 1、教師像構成要素の比重に差があらわれて居る。
- 2、大学生になると教師の性及び年齢については小・中・高校校生とは頗る異つた反応を示して居る。
- 3、現代教師像は理想的な因子のみでなく、人間の現実性を多分に含んで居ることである。

参 考 文 献

- 註(1) Schnieder, F.: Erzieher und Lehrer, 1928
- (2) KerschensTeiner, G.: Die Seele des Erziehers und das Problems der Lehrerbildung, 1921, 1955邦訳あり、玉井成光 教育者の心理 一九五七 協同出版
- (3) 宗像誠也 教師の心理 教育科学講座第二冊一九三二 岩波書店
- (4) Sprangers, E.: Lebensformen, 1927 Max Niemeguer
- (5) KerschensTeiner, Dbid Pp. 54-56

- (6) 正本 正 教育的人間 一九五三 同学社
- (7) 唐沢富太郎 教師の歴史 一九五五 創文社 二一四頁
- (8) 沢柳政太郎 教師及び校長論 一九〇八 同文館
- (9) 唐沢富太郎 前掲 (註7)
- (10) 宗像誠也 前掲 (註3)
- (11) 石谷信保 理想の教師 教育科学第一一冊 一九三二 岩波書店
- (12) 正木 正 前掲及び教育の底にあるもの 一九五〇 同学社
- (13) 林鉦三、勝田守一 教師の自己改造「教育」三卷三号 一九五三国土社
- (14) 唐沢富太郎 前掲(註7)
- (15) Boardman, C. W. An analysis of Pupil Ratings of High School Teachers. Educational Administration. 1930
- ここでは教授能率について五つの質問に対する高校生の答を扱ったもので、教授能率について教師の順位と他の質問結果との相関係数は、 $0.7371 \sim 0.893$ で、最も高いものは教師に対する好嫌と教授評価との係数である。又、生徒評価と視学官のそれとの相関は、 0.563 。教師同志間の評価と生徒との相関は 0.662 を示して居る。
- (16) Bell, Sanford: A Study of the Teacher's Influence. Pedagogical Seminary VII 1900
- (17) Macdonald, M. E. Students' Opinion os regards Desirable and Undesirable Qualifications and Practices Their Teachers in Teacher-Training Institutions Educational Administration and Supervision 1931.
- (18) Fraiser, G. W. and Armentout, W. O.: An Intruduction To Education. Scatt-Foresman & Co. 1938.

(この文献は見ることが出来なかつたので教師養成研究会叢書第二輯五〇―五二頁による)

- (19) 佐藤幸治「青年学生の観たる理想の教師」、実験心理学研究第二卷二輯 一九三二
- (20) その主なものを年代順にあげると、
- a 昭和二年、石三次郎、「教師論、好かれる教師嫌われる教師」児童心理第一卷一〇号
 - b 昭和二年、教師養成研究会叢書第二輯 学芸図書
 - c 昭和二年、大竹誠、「良い教師の条件について」児童心理第三卷一〇号
 - d 昭和二年、上武正二「児童、生徒の教師観の変動」児童心理第四卷一二号
 - e 昭和二年、佐藤幸治、野辺地正之「中等学校生徒と教師」児童心理第四卷一二号
 - f 昭和二年、友田不二男「青年と教師」青年心理第一卷一号
 - g 昭和二年、堀内敏夫「青年と教師との関係」青年心理第二卷一号その他にも、阪本氏、暮谷氏、大学卒論等で
- 注目に値する研究がある。
- (21) 沢田慶輔「講座教師の心理(一)」児童心理第八卷三号一九五四、註(15)
- (22) 上武正二 前掲(註20 d)
- (23) 上武正二前掲(註20 d)六一頁